

第674回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2025年6月度 ——

◇ 議題

<テレビ番組>

ドキュメンタリー

「オヤジと身寄りなき出所者たち

～善意が担う更生保護のいま～」

《民放連盟賞テレビ報道番組部門出品作品》

放送日時：5月30日(金)深夜2時～

◇ その他

2025年6月16日(月)開催

九州朝日放送株式会社

## 第674回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2025年6月16日(月) 15時30分～16時45分

2. 開催場所 九州朝日放送 本社7階A会議室

### 3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 7名

委員長	上野	恵梨奈
副委員長	山根	久資
委員	副田	智幸
委員	小柳	美佳
委員	サーズ	恵美子
委員	泗水	康信
委員	林田	真心子

欠席委員数 1名

委員	森	慎二
----	---	----

### 放送事業者側出席者名

代表取締役社長	森	君夫
取締役 報道制作局長	大迫	順平
執行役員 総合編成局長	柴田	高宏
報道制作局 報道情報センター長 (番組プロデューサー)	井尻	崇
報道制作局 報道情報センター (番組ディレクター)	東	大貴
番組審議会事務局長兼広報室長	吉岡	実
番組審議会事務局 (広報室)	松永	俊郎

#### 4. 議題

##### (1) テレビ番組

ドキュメンタリー「オヤジと身寄りなき出所者たち～善意が担う更生保護のいま～」

《民放連盟賞テレビ報道番組部門出品作品》

放送日時：5月30日(金)深夜2時～

##### (2) 6月・7月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告

##### (3) 5月 視聴者・聴取者応答状況の報告

##### (4) その他

#### 5. 議事の概要

委員の意見（概要）

委員からは、

- 更生保護施設がどのように運営され、保護司がどんな働きをしているのか知らないことが多く勉強になった。10年以内の再犯率など具体的な数字も示されて分かりやすかった。
- 保護司の仕事に対して理解の促進につながった。更生保護施設の仕事がどれだけ大変なのかよく理解できた。出所者の更生を支える福田昭さんを見て心が深く揺り動かされた。
- 福田さんの人の本質を見抜く力はすごいと感じた。直樹さんと本音でぶつかり涙する場面は感動した。直樹さんが協力雇用主の採用担当として寮を訪れる場面はドラマのようだった。
- 直樹さんの薬物に対する本音の吐露は、立ち直りの難しさとともに希望を感じた。
- 更生保護施設の職員の給与のデータが示されるなど現場の「リアル」が詰まっていた。更生保護や保護司の現状と役割を伝えるとともに、社会全体の課題を浮き彫りにしていた。
- 葛藤を抱えながら少しずつ信頼を勝ち取り、協力雇用主の採用担当として更生していく直樹さんの様子から、更生には社会や人々の愛情がいかに重要かを理解することができた。
- 映像ドキュメンタリーとして出所者の顔を出せずに難しかっただろうが、ディレクターが一人で取材に当たったからこそ言葉以上の思いが伝わったと思う。
- 直樹さんが更生を遂げている理由の一つに取材を受けたこともあったのではないか。犯罪の抑止には、社会との関りや、他者からの着目が大切だということを再確認させられた。
- 冒頭の刑務所から釈放された人の数、10年以内に再び刑務所に入る人の割合が現状の規模感や課題の理解を助け、重ねられたニュースの音声巧みな番組への導入になっていた。  
などの評価を頂きました。

一方、気になる点や望むこととして、

- 更生保護施設の認知度は低いので、国や刑務所とどう連携しているのか、全国にどれくらいあるのかなど、更生保護施設や制度の理解を深める説明がほしかった。
- 更生保護がほぼ民間任せになっている現状に驚いた。保護司の善意だけでは成り立たないと思うので、専門的な知識や支援の必要性について踏み込んだ取材をしてほしかった。

- 福田さんと直樹さんが涙しながら語る場面は自然に生まれた会話だったのか、ディレクターが意図して引き出したものだったのかが分からなかった。
- 福田さんの人となりを知りたいと思った。失敗談や葛藤などあれば、いまの福田さんを形成するものは何か、保護司という仕事の難しさややりがいが一層伝わったような気がする。
- 取材前に、直樹さんが必ず更生することは分からないのに、どうして直樹さんに着目したのか気になった。ほかにも着目した出所者がいたのか。
- 出所者の肩書に罪名が使われる部分は、ほかにも人物を特定させる手段がないのかと思った。
- 放送時間が深夜2時ではほとんど見られない。もう少し早い時間帯に放送してほしい。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、制作担当者からは、

- 「なぜ加害者が支援されるのか？」という意見も多いが、加害者を支援することが、社会の安全には欠かせないということを理解してもらおうと本作を制作した。
- 意図的な取材感を減らし、よりリアルな雰囲気伝えることを重視した。取材対象者の声を引き出す際は、現場の空気感を大事にしながら作弄的な雰囲気が出ないように意識した。
- プライバシー確保と取材対象者との信頼関係構築のために、ディレクター・撮影・編集を一人で行った。一人で取材に当たったからこそ取材対象者に深く入り込むことができた。
- できるだけ自然な流れで番組に入っていけるように構成したが、更生保護施設や制度の理解促進につながる説明も少し織り交ぜることができたらよかった。
- 福田さんは定められたルールに従うタイプではなく自身の信じたやり方で指導する人。だからこそ社会のルールから逸脱した出所者の指導にマッチしているのではないかと感じている。
- 視聴者に確実に判別してほしい直樹さんは仮名にしたが、複数の出所者が登場するので、視聴者が混同しないように罪名を付すなどした。
- 最初は3人から話を聞いたが、最後に直樹さんがどうなろうとも更生の意志が強い直樹さんを構成の中心に据えると決めていた。葛藤が見える直樹さんの人柄で決めた。
- 直樹さんは「取材を受けたからには更生しなければいけない」と話している。取材した側も、直樹さんを裏切らないようにしっかりと番組を制作したいと思っている。
- 保護司の仕事は簡単ではない。国の予算がきちんと配分されればと考える反面、単に給与面で魅力的になり、それを理由に保護司が増えることが正しいことなのか判断しかねている。

などの説明をしました。